

近世中期撰北地域の茶湯

——その交流関係からうかがえる特徴——

八 尾 嘉 男

一 はじめに

三都を除く近世期の各地域における茶湯の展開の研究が不十分なものであることは、谷端昭夫氏が指摘している通り、茶道史研究の問題点の一つであると言える。^{〔1〕}これは茶湯がそれ以前に見受けられない範囲で各地に流布していった近世から近代を通じての共通の問題であると言える。谷端氏が詳細に研究史を整理されているが、近世期の各地域における茶湯の展開を検討する視点は、『全集茶道』の幾つかの論考に端緒を見出すことができる。そして、雑誌『淡交』の「茶道郷土史」で全国規模の網羅が試みられたが、共に研究の糸口となる情報（人名・家名・茶庭名等）を指摘するに止まったと言える。^{〔3〕}特に後者は座談会の内容を提供する形であり、よりその傾向が強いと言える。その後、『茶道聚錦』や『茶道学大系』等で一部地域に対して言及が加えられ、^{〔4〕}『茶の湯文化学』をはじめ紹介の場が増えてはいるが、依然、自治体史や博物館・美術館の紀要での史料紹介に依存している側面が強く、各地域における茶湯の展開の研究が不十分なまま現在に至っている。

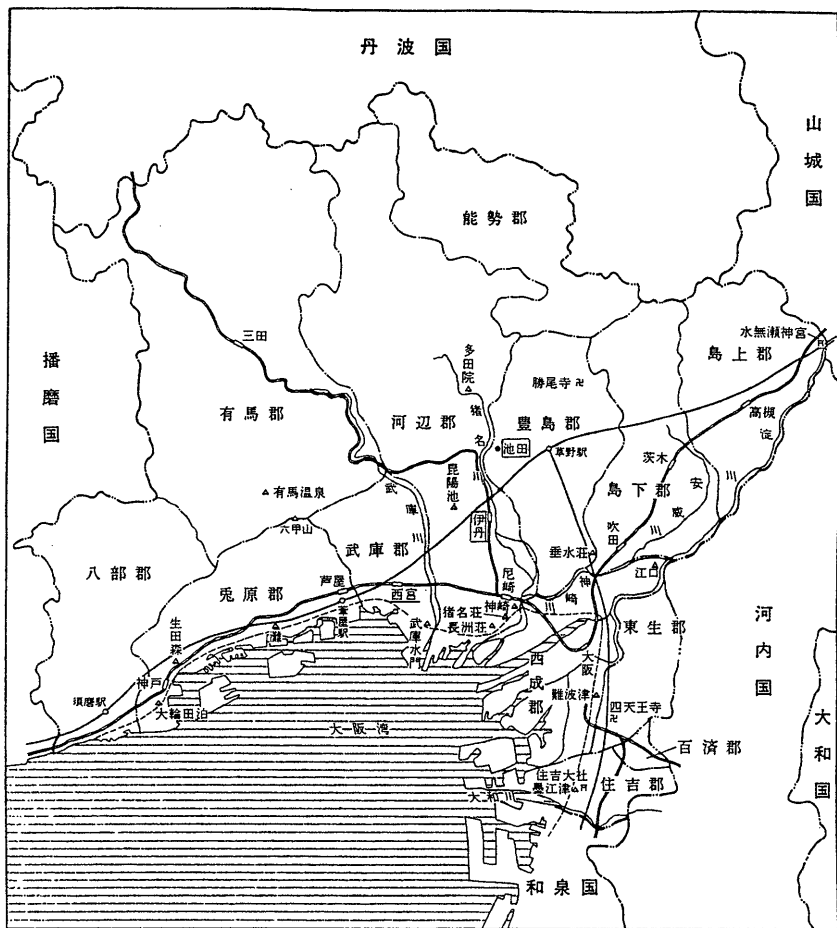
元禄期前後頃から京都・大坂の周辺地域を中心に、有力町人・豪農達が大幅に経済力を向上させる過程で幕藩体制を左右し得る存在となり、その傍らで彼らが文化を嗜む階層として大きな位置を占めていったことは、これまで

多くの先学により度々取り上げられてきた史料群の中から容易にうかがえ、彼等が茶湯に対して大きな関心を寄せていたこともここから読み取れる。そういった地域における茶湯の展開状況を個々に把握することにより、先に述べた問題点は着実に解消されると思われる。

そこで、本稿では、摂津国伊丹郷町の茶人有岡道瑞（寛文元年～享保十九年）の他会記である『茶湯百亭百会之記』（A本）と異本類（B本からE本）の検討によつて、近世中期、元禄期前後から享保期における摂北地域での茶湯とそれを支えた一側面について考察を試みてみたい。⁽⁵⁾ 本稿で対象とする摂北地域とは、摂津国の北地域、具体的には池田郷町をはじめとする摂津国豊島郡、伊丹郷町、「北在」と呼ばれる川西や宝塚等を含む地域が該当する。

近世中期摂北地域の茶湯については、自治体史を中心に言及が成されてきた。直接最も詳細に触れた端緒は、岡田利兵衛氏の『茶湯百亭百会之記』（A本）の紹介や『新・伊丹史話』⁽⁶⁾ においての言及が指摘できる。それ以前、雑誌『淡交』の「茶道郷土史」では西宮での茶湯の盛行と伊丹の小西家が指摘されているのみであったのに対し、⁽⁷⁾ 岡田氏は具体的な史料の提示と紹介を行なった。元禄期頃までに大坂近郊の在郷町として発展した摂津国伊丹郷町では、その発展の中心を担った有力酒造家を中心に俳諧をはじめとする諸芸を嗜むようになり、周辺在郷町や村落、京都・大坂の人物も含めた形で伊丹文化と呼称し得る文化サロンを形成したとし、俳諧と併せて盛んだった諸芸の一つとして茶湯を位置付けている。だが、俳諧を中心とする諸芸を嗜む形で展開した伊丹文化の一側面として触れている観が強く、全体像まで言及が及んでいない。その後、雑誌『淡交』や『茶道雑誌』等で指摘が加えられているが、⁽⁸⁾ 京都や大坂の人物と茶会で席を同じくしている数例の事実関係、鴻池家の茶湯に重点が置かれる側面が強く、同地域の茶湯の特徴として強調されるものは、俳諧との関わり以外は殆ど指摘されていないかった。

次節では、岡田氏が紹介を行なった『有岡逸士伝』を用いて検討していくこととする。



原図『国史大辞典』第八卷（一九八七年、吉川弘文館）三五七頁から一部加筆修正。

摂北地域…池田郷町をはじめとする摂津国豊島郡

伊丹郷町

「北在」と呼ばれる川西や宝塚等を含む地域

(表1)『有岡逸士伝』に見る俳諧及び連歌以外に嗜まれた諸芸(○で嗜んだ諸芸、／後の人名と家名は師匠筋を示す)

	人 名	囲碁・将棋	蹴鞠	大黒舞の風流	絲竹三絃	謡曲歌舞	丹青画	立 花	茶 湯	備 考
	筒井長舎	○								
	岡田酒粕	○								
	小西馬桜		○／吉田家	○	○／一噌家・岡島流					
	鹿島林犬	○								
☆	北川原好昌	○				○／保生将監		○		号浄貞
	鹿島貞喜		○		○	○				
	山村道与	○								山村彦兵衛入道道与、山村定友祖父
	山村盛定	○								山村定友父
☆	山村定友							○／安立坊		
☆	山田人角								○	茶湯の時、有岡道瑞と名乗る。
	木村玄伯					○			○	医師
	森本鷲群						○		○	
	岡田文考					○／伊藤見寿			○	号遊客
☆	鹿島月扇					○				号宗幽
	森本川平		○／吉田家			○／中村如水翁				
☆	貫山							○	○	浄土真宗大谷派万徳寺住持
	北川原座神						○	○／池坊家	○	
	田中酒人		○			○				
	晩嵐							○		
	宗也				○					
	北川原東明		○／飛鳥井家・難波家				○	○／北畠一之		
	上嶋其冠						○			
	森本花天					○／中村如水翁				
	上嶋徳七					○／中村如水翁				
	山村麦秀					○／福井為文				
	上嶋桃足					○				
☆	増尾良泉								○	医師
	岡田鴨峰								○／有岡道瑞	
	森本竹直		○				○			
	森本鶴秀						○			
☆	坂上善五郎					○			○	号鳥信
	小西長宅				○					
	小西久女				○					

『伊丹市史』第四巻(一九七三年、伊丹市)六四一頁より六七〇頁を基に作成。

☆の付されている人物は、『茶湯百亭百会之記』(A本)で参会が指摘できる人物である。

二 近世中期撰北地域における諸芸の展開と茶湯

前節で述べたように岡田氏は、撰津国伊丹郷町では有力酒造家を中心に、池田等の周辺在郷町や村落、京都・大坂の人物も含めた形で伊丹文化と呼称し得る文化サロンを形成していったと述べ、そこでは俳諧を中心にしつつ、蹴鞠や立花（瓶中插花、花鏡）等の諸芸が嗜まれたとし、その様子を示す史料として『有岡逸士伝』を挙げた。

『有岡逸士伝』は伊丹郷町の森本宗賢（百丸）が記した伊丹の俳人七十七人、本文中に併記された人物も含めると総計八十一人の伝記で、享保八（一七二三）年には成立していた。上・中・下の三巻の伝記からは俳諧以外に嗜まれた諸芸のこともうかがえるとし、岡田氏は『伊丹市史』で彼等が諸芸を習った師匠筋の人名を提示している。そこで、『有岡逸士伝』に見る狂歌・連歌・俳諧以外の諸芸を嗜んだ人物を抜き出すと（表一）のようになる。⁽⁹⁾

三十三人が指摘でき、その師匠筋は岡田氏の指摘通り、当代一流の師範を京都・大坂から招いている。更に師匠を得ての諸芸の嗜みと別に園芸も嗜まれたようであり、北河原猫信や松本市左のように園芸で名を馳せた人物もいた。⁽¹⁰⁾そして、一族揃って諸芸を嗜んでいる家も多い。

この三十三人に茶湯を嗜むとされた人物は他の諸芸と比べて目立って多い訳ではない。しかし、茶湯は立花や俳諧と関連的な一面もあり、蹴鞠の会が持たれる前後に併せて嗜まれる場合も少なくない。そういった点から見て、特筆されていなくとも茶湯の嗜みは存在したと思われる。実際、三十三人の中には有岡道瑞の茶会記で指摘できる人物も多く、（表一）で抽出されていなくとも道瑞の茶会記で参会が見られる人物も多い。こういった豊か、かつ複合的な要素の中で伊丹郷町とその周辺で茶湯が展開したと言える。

諸芸を学ぶに際しての師匠への入門は、上島鬼貫（俳諧）や有岡道瑞（茶湯）のような伊丹郷町出身で、かつ在住の人物や伊丹を自らの隠居地とした俳諧の宗匠（真野蜩甲、池田宗旦等）等の場合は比較的コンタクトが取り易

いのであるが、京都や大坂に居住している師匠の場合は、彼等伊丹在住の師匠が橋渡しとなる以外に

狂客有り、姓ハ河地、字ハ信房、其ノ祖何人ト云コトヲ知レズ、本在岡ノ産ニシ而、少時従リ京師ニ住ス、布帛ヲ販クヲ以テ業ト為ス、性常ニ酒ヲ愛シ、雅ヲ好ム、当時邑ノ長少、維舟先生ニ謁ント欲スル時ハ、則房ヲ以テ媒ト為ス、因リテ舟先生之門人ト称ス、然レドモ其実ハ山本西武之徒也、(後略)

とあるように、伊丹出身の在京や在坂の人物が仲介することがあった。また、立花の北畠一之や高田安立坊の名前が見受けられる点から見て、仲介を行ないつつ自らも師匠として活動した人物も存在したと言えよう。⁽¹²⁾

三 有岡道瑞と有岡道瑞他会記

前節では、近世中期伊丹郷町における諸芸の展開の一端とその豊かな文化環境について見てきたが、今節では、有岡道瑞(寛文元年〜享保十九年)と道瑞の他会記について検討を加えていくこととする。道瑞の事跡は、『有岡逸士伝』における記載を基に岡田利兵衛氏が言及を加えている。⁽¹³⁾『有岡逸士伝』では、俳人「隠竹斎人角」として

隠竹斎人角者山田氏利長之季子、一友之弟也、性茶ヲ好ミ、誹諧ヲ嗜ム、松江維舟翁之門人也、当時呼テ隠竹翁ト曰フ、嘗テ楊枝記作り而、鸚鵡粒ニ刻ム、又茶湯百亭百会書ヲ編ム、曰ク茶道則誹諧也、誹諧則茶道也、家ニ落葉ノ一如意有、自ラ銘シテ曰ク、茂叔ハ蓮ヲ愛シ、人角ハ落ヲ愛ス、暮年閑居シ而、管居士石夫人ヲ以友ト為ス、平時雪月之吟冊ニ盈ツ、号シテ隠竹集ト謂フ、姓名ヲ有岡ノ道瑞ニ易エル、

と記している。⁽¹⁴⁾人角は諸俳書に作品を多く残す俳人だが、茶湯での名声が目立っていた。通称は酢屋庄右衛門と言ひ、有岡道瑞は茶湯を嗜むに際して称した名前である。生没年は、同時期に伊丹郷町の惣年寄職を勤め、酒造仲間二十四家の一つであつた八尾八左衛門の日記の享保十九(一七三四)年十月十三日条からわかる。⁽¹⁵⁾茶の師匠は、

『有岡道瑞百亭百会記』（D本）中の記載を根拠に梶井宮慈胤法親王の孫門人とする説と千宗佐（覚々斎）の門人とする説がある（系統図）。更に『中古茶事雜集』（B本）にも

有岡氏者伊丹之産也、伊丹者其先有岡某之居而、所謂有岡、其改名伊丹也、有岡氏其後胤而、為氏町家而酢屋何某、故富而樂茶、今者無後、茶法受宗和也、

と記されている。これまで道瑞について言及された際、茶の師匠は久田宗也や千宗左（覚々斎）とされ、梶井宮慈胤法親王の孫門人とする説は採られなかった。確かに近世期に刊行された茶人の系譜書では、有岡道瑞を久田宗也門下の元禄期に京都に住んだ人物としており、後述する他会記の内容も踏まえると、後者、表千家の門人だったと思われる。しかし、『茶湯百亭百会之記』（A本）の佛日寺別傳和尚の序文や『有岡道瑞百亭百会記』（D本）冒頭の「天和元辛酉年より享保（十二）丁未年迄茶湯千会之内」という記載から、道瑞は若年から茶湯を嗜み、様々な茶湯の場に出向いたことが確かであり、¹⁷ 覚々斎（延宝六年〜享保十五年）や久田宗也（天和元年〜延享元年）の門人とだけするのは少し無理がある。では、若年期に茶湯を嗜むに際して最初に誰から学んだのかということになるが、それが梶井宮慈胤法親王の孫門人とする説になるのであろう。つまり、（系統図）の二説はどちらかが正しいというものではなく、坂上勝成と正林寺了岳から茶湯を学んだ後に、表千家の門人となって更に茶湯を学んだということであると思われる。

道瑞は先述の佛日寺別傳和尚の序文や『有岡道瑞百亭百会記』（D本）の茶系統（系統図）、『有岡逸士伝』「岡田鴨峰」の項、『八尾八左衛門日記』の葬礼の記述から見て弟子を何人か持っていたようであり、¹⁸ 今回検討する五つの茶会記の内、『茶湯百亭百会之記』（A本）と『有岡道瑞茗談集』（C本）と『茶湯会席』（E本）の末尾に

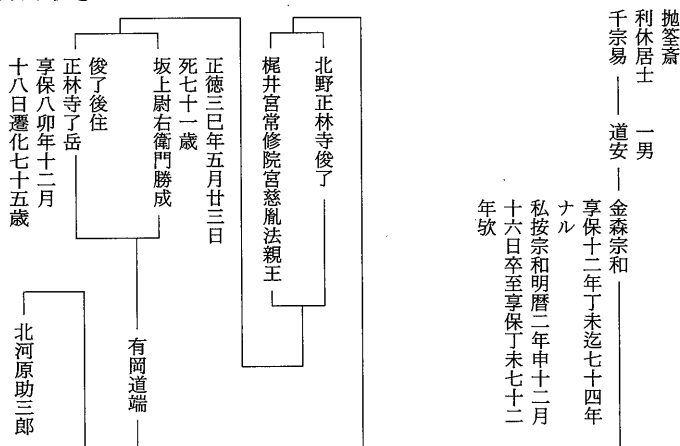
右依門葉中御所望茗談集五百会之内写之

享保五庚子季

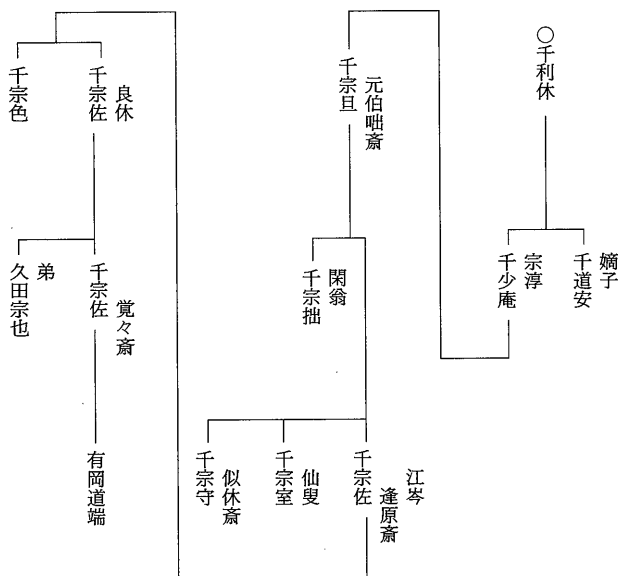
隠竹斎

(系統図) 財団法人柿衛文庫所蔵『有岡道瑞百享百会記』(D本) 所収有岡道瑞茶
道系統 (百会を記した後、奥書の前に記載)

有岡道瑞系統①



有岡道瑞系統②



五月如意珠日

有岡道瑞 判

上嶋桃足丈

同 耳広丈

とあることもそれを裏付けている。¹⁹⁾ 自会記は伝わっていないが、他会記は今回検討する五つも含めて数種類各地に存在している。更に、筒井紘一氏が詳細に紹介を行なった茶会記集成書『旁求茶会記』中に見受けられる会記に道瑞の他会記と合致する会記が複数含まれている。²⁰⁾ この事実と複数の写本の存在を考えると、道瑞の会記の伝播範囲は狭くはなかったと思われる。

次に、今回検討する五つの茶会記について各々の特徴を簡単に記すと次のようになる。

『茶湯百亭百会之記』（A本）.. 財団法人柿衛文庫所蔵。資料番号一。一冊。墨付六十四丁。有岡道瑞編。体裁と内容共に最も整備されているとして岡田氏が翻刻紹介する際に底本とした史料。佛日寺別傳和尚による元禄十二（一六九九）年五月の序文と享保五（一七二〇）年五月の奥書が記されている。

『中古茶事雑集』（B本）.. 財団法人柿衛文庫所蔵。資料番号四。一冊。墨付九十六丁。有岡道瑞、坂上二酉編。A本と異なる会、A本と同一亭主の別会が含まれる（後述表3・4）。

右百会之紙余り申候故、書附申候、可笑々々、道瑞

と、百会の後に近衛家や土屋相模守の口切茶会、京都の刀目利家原自仙の茶会等十二会が記され、その後二西の他会記を含む宝暦四（一七五四）年から同十一年までの百七十一会が書かれている。百七十一会の末尾に

黒藁ヲ有岡氏角坊染阿へ送ル発句

人はいさ只ひゝやりと黒藁 人角 今ツクノ法有ニアリ、

田九菴 岡崎村太田見竜居、角坊染阿寓居

「近世中期摂北地域の茶湯——その交流関係からうかがえる特徴——」

今迄か死ての旅之花の宿 二酉

と記され、「鶴鶴藏書」と「飯田氏藏」の蔵書印がある。この蔵書印があることから考えて、B本は二酉の自筆本ではなく、二度程の転写を経ている可能性が高いと思われる。序文はA本と異なる形で記され、享保五年三月で奥書がある。²¹⁾

『有岡道瑞茗談集』（C本）..財団法人柿衛文庫所蔵。資料番号三。一冊。墨付五十八丁。有岡道瑞編。九十九会を記し、その内容はA本と同じである（後述表3）。序文はなく、奥書はA本と合致する。その後

此茗談集ハ、丹羽氏のぬしひめをかるゝ所なりしを、予かひたすらに求めるにゆるして、文化十のをいし西の春、価千金の雪の燈の下に写之、長く一卷の宝を我家にとゝめる事とハなりぬ、

大橋季叟

と、丹羽氏の所蔵だったものを、文化十（一八一三）年に大橋季叟が書写し、更に

明治三十年九月、伊藤吉六とのより借り得て、恒つ夜昇子ニ写しもらひぬ、

と、伊藤吉六所蔵だったものを借り受け、明治三十（一八九七）年に写している。

『有岡道瑞百亭百会記』（D本）..財団法人柿衛文庫所蔵。資料番号二。一冊。墨付六十一丁。有岡道瑞編。序文はなく、宝曆九（一七五九）年三月に遅松が

有岡道瑞か茶席百会之記、或人の本をかりて写之、茶道の世系をいたすを見れハ隠竹か自書ならんかし、卷末の数会主客を不記、疑らくハ道瑞自身の茶会を記したるか、好事者一人物なれニてハ、何となくしのはしくて見るまゝに写し置伝りぬ、道瑞ハ摂州伊丹の人に於て、有明の岡といふ処古名にあり、有岡ハ則其所也といふ、是又予か傳聞を以て記之、詳悉ハ後日を期する者也、

宝曆第九三月十八日

遅松誌之

と記して書写したものが「丙戌九月自七日至十五日」に再写されている。冒頭「天和元辛酉年より享保丁未年

迄茶湯千会之内」と記載がある。原本が作成されたのは、この記述と前述（系統図）の金森宗和の年忌記載から考えて、享保十二年をそれ程隔てない時期と思われる。天和元（一六八一）年は京都で茶湯を嗜みだした時期の一つの目安となると考えられる。A本と違う会やA本と同一亭主の別会があり、A本と順番の変更もある（後述表3・5）。伊丹以外の人物が亭主の会は、亭主の地所を記している。

『茶湯会席』（E本）…財団法人柿衛文庫所蔵。資料番号二四八〇。墨付六十一丁。一冊。有岡道瑞編。序文はなく、享保五年五月の奥書はA本と合致する。A本と内容は同じである（後述表3）。A本と体裁、筆跡面では一番似通っている。

『茶湯百亭百会之記』（A本）と『有岡道瑞名談集』（C本）、『茶湯会席』（E本）は享保五年五月成立の同系統と思われる、『中古茶事雑集』（B本）は享保五年三月成立、『有岡道瑞百亭百会記』（D本）は享保十二年をそれ程隔てない時期に成立の異系統と考えられる。先に述べた『有岡逸士伝』の記載から、『有岡逸士伝』の成立する享保八年までに『茶湯百亭百会書』を編んでいたことがわかるが、A本からE本の合致状況等を考えると、現存するものの基本になるものは『茶湯百亭百会之記』（A本）の内容であると思われる（後述表3）。ということは、『有岡逸士伝』のいう『茶湯百亭百会書』は、A本からE本の合致状況や作成年次を踏まえて考えると、『中古茶事雑集』（B本）を経て、より道瑞が厳選を加えた『茶湯百亭百会之記』（A本）のことを指すと考えることができのではないだろうか。享保十二年成立の『有岡道瑞百亭百会記』（D本）は享保五年以降、新たに参会した茶事も含めて改めて取捨を行なっていると思われる。その取捨は八尾八左衛門の日記の享保十六（一七三一）年七月六日条に

（前略）道瑞老より□□頼置候茶湯百亭百会之写来候、

とあることから享保十六年の段階では区切りがついていたことがわかる。²² 取捨を止めた時期は検討する材料が少な

いので明確な言及ができないが、享保十二年までは確実に取捨を行なっていたことだけは言えよう。A本からE本に収められた茶会の時期は、各本共に原本成立年次をそう隔てない時期が当然下限となるが、上限の時期が次に問題となる。序文のある本に必ず記されている元禄十二年五月という年次は、道瑞が自己の他会記を編集して門弟に与えることを考え、それに際しての序文を別傳和尚に与えられた年次であると思われる。『茶湯百亭百会之記』（A本）の千宗左が亭主の会は元禄十二年十二月の会であり、元禄十二年までは確実に遡れる。しかし、先述のように近世期の茶人の系譜書では道瑞を元禄期に活躍した京都の茶人としており、元禄も後半に近い元禄十二年よりもう少し遡れる。この点と『岡道瑞百亭百会記』（D本）の天和元（一六八一）年という記載を踏まえて考えると、元禄元（一六八八）年頃まで遡ってもそう問題はないと思われる。『中古茶事雑集』（B本）についても下限はほぼ同様に考えて良いと思われる。よって、本稿では、岡田氏が明確な言及を加えていない『茶湯百亭百会之記』（A本）自体の該当時期は、元禄元年から享保五年までと考えて検討を進めることとする。

享保五年の奥書に「茗談集五百会之内写之」とあり、五百会の内から百会を選んだことがわかる。この百という会数は、『中古茶事雑集』（B本）中、宝暦四（一七五四）年から同十一年までの百七十一会が記される前に利休の百会は亀鑑なり、或ハ招れ、あるひハまねき、又ハ文のはしに見へ、咄に聞けるを書つゝ、くなくとも考てむかしをしのふのはなしとともと、

葉月十五日

二酉書

とあり、利休百回忌（元禄三年）から興った利休回帰の風潮を考えると、『利休百会記』への意識がうかがえると思われる。

次に内容分析に入っていくが、内容分析は『茶湯百亭百会之記』（A本）について先ず行ない、それと比較する形でB本からE本について検討することとする。

四 有岡道瑞の他会記に見る摂北地域の茶人の交流関係

岡田氏は、『茶湯百亭百会之記』（A本）の茶会は、伊丹郷町での会が半数以上を占めつつも、大坂・摂津地域全般・播磨地域・和泉地域と広範囲な場所で開催され、交流範囲の広さは注目に値すると述べている。『有岡道瑞百亭百会記』（D本）に記された地所を参考に、一人一会、合計百人の亭主を分類すると次のようになる（表2）。

伊丹郷町の酒造家とその一族…森本七左衛門、北川原吉三郎、北川原浄貞、岡田又太郎、岡田藤次郎、鹿島十郎

右衛門、鹿島宗幽、上嶋常音、上嶋藤右衛門、上嶋安右衛門、上嶋九良兵衛、上嶋安九郎、上嶋五左衛門、坂

上松太郎、坂上彦太郎、坂上尉右衛門、坂上善五郎、

伊丹郷町近郊の酒造家とその一族…〔加茂〕岩田猪兵衛、〔加茂〕岩田五郎左衛門、〔山本〕坂上松右衛門、〔山

本〕坂上与蔵、〔山本〕田村梅甫、〔山本〕田村乗和、〔鴻池〕鴻池来助、〔鴻池〕鴻池幸十郎、〔鴻池〕鴻池源

右衛門、〔池田〕坂上平右衛門、〔池田〕坂上十五郎、

摂北地域の酒造家…坂上佐平次、坂上伊兵衛、坂上傳右衛門、

伊丹郷町の僧侶と医師…貫山、増尾良泉（医師）、望海和尚、戒曉律師、仏日寺別伝和尚、

伊丹郷町の人物…山村七良右衛門、西郡仙斎、小林六良右衛門、梅垣道宜、森平六、木村伊右衛門、

池田郷町の人物…山川仁右衛門、荒木平兵衛、

茶湯宗匠及び茶道具の職人…千宗左（覚々斎）、久田宗也、黒谷将法院、薩摩屋素朴、

俳諧及び茶湯以外の遊芸の宗匠…丸屋嘉兵衛（蹴鞠）、喜多脇一元（大鼓）、池田浄意（俳諧）、喜多脇又蔵（大

鼓）、

公家…有隣軒（鷹司輔信）、

(表2) 財団法人柿衛文庫所蔵『茶湯百亭百会之記』(A本) 茶会亭主一覧

正客	会数	亭主名	場所	月	日	有岡道瑞以外の招客名
	1	千宗左	京都	12	5	万屋市兵衛、十一屋長右衛門、丸屋嘉兵衛、
☆	2	有隣軒	京都	12	2	蓮角庵、岩田五良左衛門、有馬了夢、自在軒二三、
☆	3	喜多(北)脇一元	京都	10	17	上嶋勘四郎、森本九良左衛門、
	4	鎰屋宗周	京都	10	24	望月牧意、井筒屋彦四郎、
	5	山下祐也	京都	10	23	黒谷将法院、清水教胤、田中何求、
	6	(黒谷)将法院	京都	10	19	上嶋勘四郎、森本九良右衛門、岡田又太郎、望月牧意、
	7	七里彦六	京都	10	22	鎰屋宗周、花房宗利、山下祐也、望月牧意、
	8	正賢庵	堺	4	19	上嶋勘四郎、
☆	9	九昌院	大坂	3	21	河合久兵衛、
	10	岡本宗吟	大坂	4	9	金屋与右衛門、茨木屋太兵衛、金屋治兵衛、
☆	11	山村七良右衛門	伊丹	1	5	森本宗信、石丸見寿、森本曾右衛門、
☆	12	家原自仙	京都	8	14	北脇一元、進藤長右衛門、
☆	13	頂妙寺清純坊	京都	5	22	白川与次兵衛、大橋内匠、
	14	松尾朽意	京都	10	11	家原自仙、袋屋二得、
☆	15	三木権太夫	京都	2	29	三木忠庵、
☆	16	坂上松右衛門	山本	6	9	桑原松庵、
	17	坂上十五郎	池田	11	24	正賢庵、本養寺、上嶋勘四郎、岡田又太郎、
☆	18	岡田又太郎	伊丹	3	29	橋川兵右衛門、木村仁兵衛、
☆	19	森本七左衛門	伊丹	3	12	鹿嶋源右衛門、森本吉左衛門、
☆	20	岡田藤次郎	伊丹	12	5	上嶋勘四郎、北川原次郎三郎、
☆	21	西郡仙斎	伊丹	1	6	松浦平右衛門、
☆	22	坂上与蔵	山本	1	27	坂上宗祐、
	23	鴻池来助	鴻池	10	17	坂上尉右衛門、蓮角房、
☆	24	正林寺了岳坊	京都	6	11	小林六良右衛門、坂上尉右衛門、
	25	小林六良右衛門	伊丹	9	1	上嶋勘四郎、木村仁兵衛、
	26	坂本周斎	京都	12	4	松尾朽意、本田佐太夫、進藤長右衛門、
☆	27	熊田市右衛門	京都	12	5	近藤宗春、近藤長右衛門、
☆	28	北川原吉三郎	伊丹	2	22	鴻池来助、新稲四良太夫、
	29	鴻池源右衛門	鴻池	2	6	北川原浄貞、上嶋勘四郎、森本八郎右衛門、
☆	30	岩崎玄蕃	京都	3	20	鞍貫宗仙、経師傳右衛門、
☆	31	貫山	伊丹	7	11	森本蘭舟、
☆	32	鹿島十郎右衛門	伊丹	5	13	森本蘭舟、金谷嘉右衛門、
☆	33	坂上佐平次	摂北	9	23	訥明律師、山川平助、
	34	仏日寺別伝和尚	伊丹	9	12	戒曉律師、森本蘭舟、
☆	35	北脇又蔵	京都	10	3	沢屋長右衛門、
	36	望海和尚	伊丹	12	12	戒曉律師、蓮肉菴、
	37	萬屋又兵衛	京都	11	17	松尾朽意、家城十良右衛門、進藤長右衛門、
☆	38	薩摩屋素朴	京都	3	11	伊勢屋小兵衛、十一屋長右衛門、
	39	岩田猪兵衛	加茂	12	11	田村保幹、坂上彦太郎、
	40	戒曉(律師)	伊丹	12	11	望海和尚、南宗竹、蓮肉菴、北川原浄貞、
	41	山川仁右衛門	池田	10	22	望海和尚、蓮肉菴、上嶋安右衛門、
	42	鴻池幸十郎	鴻池	8	24	望海和尚、慈眼和尚、蓮肉菴、
☆	43	丸屋嘉兵衛	京都	12	11	十一屋長右衛門、
☆	44	平野屋五兵衛	大坂	11	2	蓮肉菴、

正客	会数	亭主名	場所	月	日	有岡道瑞以外の招客名
☆	45	笹屋酉刻	京都	12	6	久田宗也、十一屋長右衛門、
☆	46	上嶋藤右衛門	伊丹	10	20	上嶋勝右衛門、上嶋恒次郎、
☆	47	坂上善五郎	伊丹	6	21	友田吉兵衛、瀬堀四良五郎、
☆	48	蓮肉菴	山本	12	16	鹿嶋宗幽、上嶋安右衛門、
☆	49	下大坊了瑞	有馬	9	6	岩田五良左衛門、
	50	浄福寺内長泰院了韵	京都	11	22	大文字嘉右衛門、大文字三郎右衛門、大文字平六、
☆	51	上嶋九良兵衛	伊丹	3	6	三宅文雅、上嶋勝右衛門、
☆	52	家原自元	京都	4	2	三木権太夫、加賀屋治郎兵衛、十一屋長右衛門、
	53	十一屋長右衛門	京都	11	29	杉村三良左衛門、津留源右衛門、源江屋仁兵衛、宗也、
☆	54	田村梅甫	山本	12	11	蓮肉菴、
☆	55	北川原淨貞	伊丹	1	22	山村彦兵衛、森本重右衛門、
☆	56	山口久保	京都	3	21	森本宗賢、北川原彦四郎、石坂小兵衛、
	57	上嶋安九郎	伊丹	5	11	戒曉律師、岩田猪兵衛、鴻池源右衛門、
	58	高台寺内月真院	京都	10	17	望海和尚、蓮肉菴、
	59	松屋三良兵衛	京都	12	14	久田宗也、升屋藤右衛門、
	60	芳野屋理兵衛	大坂	11	3	蓮肉菴、下村平兵衛、
☆	61	高台寺順蔵主	京都	5	12	田村源右衛門、
	62	上嶋安右衛門	伊丹	4	2	岩田五良左衛門、蓮肉菴、
	63	木村伊右衛門	伊丹	11	14	小西善十郎、上嶋安右衛門、岡田新兵衛、
	64	増尾良泉	伊丹	11	18	鹿嶋宗幽、上嶋常音、森本宗賢、
	65	廣嶋屋平十郎	京都	10	17	望海和尚、蓮肉菴、
☆	66	上嶋五左衛門	伊丹	11	11	蓮肉菴、油屋藤右衛門、升屋孫四郎、
	67	塗師八左衛門	京都	12	8	正林寺了岳坊、三木権太夫、十一屋長右衛門、
☆	68	坂上伊兵衛	摂北	1	9	友田吉兵衛、木村伊右衛門、
☆	69	森平六	伊丹	7	3	坂上平右衛門、坂上善右衛門、
☆	70	坂上傳右衛門	摂北	4	16	坂上市兵衛、
☆	71	鴻池宗牧	大坂	4	14	大場立元、多賀治助、
☆	72	坂上彦太郎	伊丹	4	9	副村半左衛門、坂上平右衛門、
	73	進藤元意	京都	6	19	田中素秋、白井正竹、
☆	74	荒木平兵衛	池田	12	12	蓮肉菴、下村平兵衛、
☆	75	松坂屋喜左衛門	京都	12	5	池田浄意、十一屋長右衛門、
☆	76	鴻池道徳	大坂	12	4	近藤宗故、十一屋長右衛門、
	77	池田浄意	京都	12	14	人見啓安、小林寿閑、辻次良左衛門、
☆	78	福嶋屋了意	大坂	4	12	油屋安九郎、十一屋長右衛門、肥後屋次郎三、
☆	79	関長兵衛	麻田	5	12	蓮肉菴、
☆	80	随風軒了夢	有馬	9	27	藤野素竹、中村瑞之、田崎十良左(右カ)衛門、
	81	播磨屋助久	大坂	5	20	蓮肉菴、上嶋常音、
	82	有馬善福寺	有馬	9	20	横井安節、田崎十良右衛門、随風軒了夢、
☆	83	田崎十良右衛門	姫路	9	21	池坊孫右衛門、角坊了夢、
☆	84	藤野素竹	福山	10	2	(秋田)大野久左衛門、田崎十良右衛門、随風軒了夢、
☆	85	宇保伊右衛門	有馬	9	6	上嶋安九郎、
	86	加賀屋又吉	大坂	10	27	蓮肉菴、坂上傳右衛門、岩田五良左衛門、
	87	岩田五郎左衛門	加茂	8	27	藤野素竹、山川仁右衛門、蓮肉菴、
☆	88	自在軒二三	京都	12	9	(岩田)五良左衛門、春堂、了夢、蓮肉、

(表2) 財団法人柿衛文庫所蔵『茶湯百亭百会之記』(A本) 茶会亭主一覧

正客	会数	亭主名	場所	月	日	有岡道端以外の招客名
	89	田村乗和	山本	5	8	古潤和尚、蓮肉菴、岩田猪兵衛、
☆	90	牧市左衛門	京都	12	9	岩田五良左衛門、蓮肉菴、
☆	91	梅垣道直	伊丹	1	16	浮嶋清右衛門、森平六、
☆	92	近藤宗故	京都	5	14	近藤元意、池田浄意、小林祐貞、
	93	上嶋常音	伊丹	3	19	播磨屋助久、上嶋勝右衛門、鹿嶋太良右衛門、
☆	94	坂上松太郎	伊丹	12	14	鴻池源右衛門、
	95	坂上平右衛門	池田	12	5	田村保幹、
☆	96	岩田久五郎	大坂	6	25	蓮肉菴、木村七郎兵衛、鎌田新助、
	97	鹿嶋宗幽	伊丹	2	6	望海和尚、岩田五郎左衛門、坂上弥右衛門、
	98	坂上尉右衛門	伊丹	3	21	神田内匠、坂上皆右衛門、
☆	99	青木甲斐守	麻田	12	21	中沢宗真、
☆	100	久田宗也	京都	12	6	十一屋長右衛門、笹屋酉刻、

『茶湯百亭百会之記』(A本) (『伊丹資料叢書』1 伊丹文芸資料所収、一九七五年、伊丹市役所)
 註) 会数の横に☆が付されている会は、有岡道端が正客として招かれた会である。又、「場所」の
 項、「摂北」は具体的に地所の特定はできないが、摂北地域の酒道家であることを示す。

大名及び大名家留守居…青木甲斐守(摂津国麻田藩)、(京都) 牧市左衛門(細川家)

京都の町人…鑑屋宗周、山下祐也、七里彦六(主殿寮)、家原自仙(刀目利)、家原自元(刀目利)、三木權太夫(長州紙藏元)、

坂本周斎(糸割符)、熊田市右衛門、岩崎玄蕃(儒者)、笹屋酉刻、十一屋長右衛門(蔵紙直買頭分)、山口久保、松屋三良兵衛(長崎問屋)、廣嶋屋平十郎(酒造出店)、進藤元意、自在軒

二三(遁世者)、松坂屋喜左衛門(買物問屋)、近藤宗故、塗師八左衛門(塗師)、松尾朽意、萬屋又兵衛、

大坂の町人…岡本宗吟、平野屋五兵衛、芳野屋理兵衛、鴻池道億(両替商)、福嶋屋了意、播磨屋助久、加賀屋又吉、岩田久五郎(酒屋)、鴻池宗牧(両替商)、

伊丹郷町以外の寺院…(京都) 高台寺内月真院、(京都) 高台寺順藏主、(有馬) 善福寺、(北野) 正林寺了岳坊、(大坂天満)

九昌院、(山本) 蓮肉菴、(京都) 浄福寺内長泰院了韵、(京都) 頂妙寺清純坊、(有馬角坊) 隨風軒了夢、(堺) 正賢庵、(有馬) 下大坊了瑞、

その他の地域の人物…(姫路) 田崎十郎右衛門、(麻田) 関長兵衛、(備後福山) 藤野素竹、(有馬) 宇保伊右衛門、

京都の町人や僧侶、特に寛文元（一六六一）年以降に摂北地域に家領を持った近衛家との茶湯における交流関係を近衛家熙の側近進刑部大輔長之の他会記参会記録『他所之茶事道具献立之留』から指摘できる京都の町人や僧侶（傍線を付した人物）が見える。更に、京都の町人には、三井高房の『町人考見録』に名前のある人物も含まれ（家原自仙・自元、三木権太夫、薩摩屋素朴）、摂津国麻田藩藩主青木甲斐守（口切茶会）や細川家の京都留守居役牧市左衛門の名も見える。百会に有岡道瑞を除いて百三十七人の人物が参会しているが、その個々の分類は概ね亭主と同様の傾向が見受けられる。その百三十七人から二会以上の複数会参会した人物を示すと（表2）、

二会…森本九良左衛門（三・六）、岡田又太郎（六・一七）、木村仁兵衛（一八・二五）、坂上尉右衛門（二三・二四）、松尾朽意（二六・三七）、北川原浄貞（二九・四〇）、田村保幹（三九・九五）、友田吉兵衛（四七・六八）、鹿嶋宗幽（四八・六四）、三木権太夫（五二・六七）、岩田猪兵衛（五七・八九）、鴻池源右衛門（五七・九四）、下村平兵衛（六〇・七四）、上嶋常音（六四・八一）、坂上平右衛門（六九・七二）、池田浄意（七五・九二）、上嶋（油屋）安九郎（七八・八五）、藤野素竹（八〇・八七）

三会…望月牧意（四・六・七）、進藤長右衛門（一二・二六・三七）森本吉左衛門（宗賢）（一九・五六・六四）、森本蘭舟（三一・三二・三四）、戒律律師（三四・三六・五七）、上嶋安右衛門（四一・四八・六三）、久田宗也（四五・五三・五九）、上嶋勝右衛門（四六・五一・九三）、田崎十良右衛門（八〇・八二・八四）

五会…随風軒了夢（二・八二・八三・八四・八八）

六会…望海和尚（四〇・四一・四二・五八・六五・九七）

七会…岩田五郎左衛門（二・四九・六二・八六・八八・九〇・九七）、上嶋勘四郎（三・六・八・一七・二〇・二五・二九）

九会…十一屋長右衛門（一・三八・四三・四五・五二・七五・七六・七八・一〇〇）

二十二会…蓮角庵（蓮肉菴）（二・二三・三六・四〇・四一・四二・四四・五四・五八・六〇・六二・六五・六

六・七四・七九・八一・八六・八七・八八・八九・九〇・九六）

の三十三人が指摘できる。厳選された百会の結果である以上、実際はもっと頻繁に交流を重ねた人物は存在すると考えられる。酒造家を中心に摂北地域の人物、中でも近衛家熙との茶湯での交流関係が指摘できる町人の会に多数名を連ねた人物が多く指摘できる。

B本からE本を『茶湯百亭百会之記』（A本）と比較すると（表3）、『有岡道瑞茗談集』（C本）と『茶湯会席』

（E本）はC本が千宗左が亭主の会を除く九十九会しか記していない点以外はA本と合致する。客人名の記載は、名字が屋号で記載されたり、略記されたりするもの以外に多少の相違はあるがA本と殆ど合致する。『中古茶事雑集』（B本）はA本に無い亭主が十六名あり、残り八十四会中二十六会はA本に記載された亭主であるが別の日の会である（表3・4）。A本と四十二会異なることとなり、内二十六会は道瑞と二回以上茶湯で交流を持った人物の会になる。その四十二名を分類すると、

伊丹郷町の酒造家とその一族…枅屋彦三郎、北河原与次兵衛、岡田又太郎、油屋安右衛門、岡田藤次郎、北河原助三郎、油屋五郎四郎、坂上彦太郎、坂上松太郎、一文字屋助五郎、

伊丹郷町近郊の酒造家…〔山本〕坂上與藏、〔山本〕坂上松右衛門、〔加茂〕岩田五兵衛、〔山本〕坂上梅甫、〔山本〕田村乗和、〔鴻池〕鴻池新右衛門、〔鴻池〕山中（鴻池）来助、

摂北地域の酒造家…坂上了意、坂上市三、

伊丹郷町の僧侶と医師…佛日別傳和尚、大廣白蓮和尚、戒曉律師、

伊丹郷町の人物…鏡屋良道、梅垣道宜、

俳諧及び茶湯以外の諸芸宗匠…池田浄意（俳諧）、

京都の町人…十一屋長右衛門（蔵紙直買頭分）、笹屋与兵衛、白木屋彦太郎、松屋三郎兵衛（長崎問屋）、進藤元意、

大坂の町人…鴻池宗牧（両替商）、

伊丹郷町以外の寺院…〔京都〕清和院、〔京都〕長泰院、〔京都〕順藏主、〔京都〕月真院、〔角坊〕隨風軒了夢、

〔有馬〕下大坊了瑞、

その他の地域の人物…〔有馬〕角坊伊右衛門、〔山本〕了瑞、

現段階で分類不明…葛野仁兵衛、西郡八左衛門、原東鍋七、

となる。分類不明もあるが、A本と同じ傾向を示していると言える。客人についてはA本と合致する茶会ではあっても記載の相違が少なからず見受けられる。しかし、会記中の個々の人物の分類はここまで見てきた傾向と同じものを示していると思われる。A本と異なる四十一会からA本同様複数会参加している人物を見ると（表3・4）

二会…上嶋勘四郎（二五・七三）、田村保幹（三七・九五）、戒曉（五六・七一）、上嶋安九郎（四五・八〇）、十

一屋長右衛門（六一・六九）、上嶋常音（六三・七六）

三会…鴻池（山中）新右衛門（四四・八〇・九五）、久田宗也（六一・七五・七八）

四会…望海和尚（五六・六四・六五・七一）

十一会…蓮角庵（蓮肉菴・山本秀海）（九・三三・四〇・四三・四四・五六・六四・六五・六六・七一・九四）

となる。A本と大きな相違はないと言えよう。『有岡道瑞百亭百会記』（D本）はA本と違う会が十三会あり、十三会の内、小野清和院と鏡屋良道が亭主の会は『中古茶事雜集』（B本）にも記載のある会である。薩摩屋素白は薩摩屋素朴と同一人物と思われ、ここまで見た中で唯一、二会記されている。その十三会について分類すると（表3・5）、

(表3) 財団法人柿衛文庫所蔵『茶湯百亭百会之記』(翻刻史料・A本)とその他の写本

会数	B 本	C 本	D 本	E 本
1	12・5→12・6	—————	A本と同じ	A本と同じ
2	蓮角庵→山本秀海 山本秀海正客	岩田五郎左衛門→岩間五郎左衛門	蓮角庵→山本秀徳	A本と同じ
3	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
4	鎗屋宗周→鎗屋宗甫、井筒屋彦四郎記載なし	A本と同じ	井筒屋彦四郎→井筒屋彦太郎	A本と同じ
5	A本26 本田佐太夫記載なし	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
6	A本78 肥後屋次郎三→肥後屋次郎三郎	A本と同じ	森本九良右衛門→森本九郎左衛門	A本と同じ
7	A本76	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
8	A本38 薩摩屋素朴→薩摩屋新兵衛	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
9	枳屋彦三郎	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
10	A本5	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
11	A本6 客人有岡道瑞と望月三郎助のみ	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
12	A本7 10・22→11・22	A本と同じ	進藤長右衛門→近藤長右衛門	A本と同じ
13	A本8 上嶋勘四郎正客	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
14	A本9	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
15	A本10 岡本宗吟→岡本宗順	A本と同じ	2・29→2・19 客人名記載なし	A本と同じ
16	A本11 森本曾右衛門記載なし	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
17	A本12	正賢庵→正賢寺	A本と同じ	正賢庵→正賢寺
18	A本13 白川与次兵衛記載なし	橋川兵右衛門→橋川曾右衛門	A本と同じ	A本と同じ
19	A本14 家原自仙→家原自儒	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
20	A本15	A本と同じ	岡田藤次郎→岡田藤九郎	A本と同じ
21	北河原与次兵衛	松浦平右衛門→松浦平左衛門	A本と同じ	A本と同じ
22	A本17 上嶋勘四郎と岡田又太郎記載なし	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
23	A本18と同一亭主の別会	A本と同じ	鴻池来助→鴻池栄助	A本と同じ
24	A本19	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
25	A本20と同一亭主の別会	A本と同じ	木村仁兵衛記載なし	A本と同じ
26	A本21 松浦平右衛門→松浦平左衛門	進藤長右衛門→近藤七左衛門	A本と同じ	A本と同じ
27	A本22と同一亭主の別会	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
28	A本23と同一亭主の別会	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
29	A本24	A本と同じ	A本44 蓮肉菴→山本秀海	A本と同じ
30	A本25 有岡道瑞正客	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
31	A本27 近藤長右衛門→十一屋長右衛門	A本と同じ	貫山→垣山 森本蘭舟→森本宗徳	A本と同じ
32	A本28	A本と同じ	森本蘭舟→森本宗徳 金谷嘉右衛門記載なし	A本と同じ
33	葛野仁兵衛	A本と同じ	A本45	A本と同じ
34	A本30 鞍貫宗仙→鞍貫傳右衛門	A本と同じ	9・12→9・13	A本と同じ

会数	B 本	C 本	D 本	E 本
35	A本31	A本と同じ	A本36 蓮肉菴→秀海	A本と同じ
36	A本32	A本と同じ	A本37 家城十良右衛門→家城十郎兵衛	A本と同じ
37	山本了瑞	家城十良右衛門記載なし	A本38と同一亭主の別会カ(薩摩屋素白)	家城十良右衛門→家城十郎兵衛
38	A本34と同一亭主の別会	A本と同じ	A本48 蓮肉菴→蓮肉庵秀海	A本と同じ
39	A本35 北脇又蔵→北脇平右衛門 沢屋長右衛門→進藤元意	A本と同じ	A本38カ(月日・亭主記載なし)	A本と同じ
40	大廣白蓮和尚	A本と同じ	A本39	A本と同じ
41	A本37 進藤長右衛門→十一屋長右衛門	A本と同じ	A本40	A本と同じ
42	A本39	A本と同じ	北河原助三郎	A本と同じ
43	A本40と同一亭主の別会	A本と同じ	A本29	A本と同じ
44	一文字屋助五郎	A本と同じ	A本43	A本と同じ
45	鴻池新右衛門	A本と同じ	小野清和院	A本と同じ
46	A本43 丸屋嘉兵衛→丸屋加兵衛	A本と同じ	進藤一葉	A本と同じ
47	清和院	A本と同じ	A本46 客人に上嶋万次郎追加	A本と同じ
48	A本45と同一亭主の別会	A本と同じ	鹿嶋九郎右衛門	A本と同じ
49	A本46	A本と同じ		A本と同じ
50	A本48	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
51	A本49と同一亭主の別会	A本と同じ	上嶋勝右衛門→上嶋庄右衛門	A本と同じ
53	A本51 客人に三宅永治郎追加	11・29→11・23 杉村三良左衛門→杉浦三良左衛門	杉村三良左衛門→杉井三良右衛門 宗也→太田道也	杉村三良左衛門→杉浦三郎左衛門
54	A本52	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
55	A本53と同一亭主の別会	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
56	A本54と同一亭主の別会カ	A本と同じ	3・21→3・11 山口久保→十一屋久保	A本と同じ
57	北河原助三郎	A本と同じ	客人に山本秀海追加 鴻池源右衛門→鴻池新右衛門	A本と同じ
58	A本56	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
59	A本57 客人に蓮角庵追加	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
60	A本58と同一亭主の別会	芳野屋理兵衛→芳野屋利兵衛	池田、山川素白	A本と同じ
61	A本59と同一亭主の別会	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
62	白木屋彦太郎	4・2→4・21	4・2→4・21	4・2→4・21
63	A本62と同一亭主の別会	A本と同じ	鏡屋良意	A本と同じ
64	A本61と同一亭主の別会	A本と同じ	池田、荒木平康	A本と同じ
65	鏡屋良意	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
66	坂上市三	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
67	A本65	A本と同じ	A本42 8・24→8・14	A本と同じ
68	A本66 11・11→11・2	A本と同じ	A本60	A本と同じ
69	西郡八左衛門	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
70	岩田五兵衛	A本と同じ	中村平兵衛	A本と同じ
71	A本16と同一亭主の別会カ	A本と同じ	北河原彦四郎	A本と同じ
72	厚東鍋七	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ

会数	B 本	C 本	D 本	E 本
73	A本71と同一亭主の別会	田中素秋→田中宗秋	6・19→6・13 進藤元意→近藤元意	A本と同じ
74	A本92 近藤元意→進藤元意	12・12→11・12	岩田理兵衛	12・12→11・12
75	A本73と同一亭主の別会	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
76	油屋五郎四郎	A本と同じ	近藤宗故→松坂屋宗故	A本と同じ
77	A本75 松坂屋喜左衛門→松坂や喜右衛門	A本と同じ	人見啓安→人見路安	A本と同じ
78	A本77と同一亭主の別会	A本と同じ	客人名記載なし	A本と同じ
79	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
80	A本80と同一亭主の別会	中村瑞之→中村瑞ト	藤野素竹→藤井素竹 中村瑞之→中村瑞ト 田崎十良右衛門→田中十郎右衛門	中村瑞之→中村瑞ト
81	蓮肉菴→山本秀海	A本と同じ	播磨屋助久→播磨屋助右衛門	A本と同じ
82	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
83	客人名に同(池坊)傳三追加	A本と同じ	田崎十良右衛門→田嶋十郎右衛門	A本と同じ
84	藤野素竹→藤野紫竹	A本と同じ	10・2→12・2	A本と同じ
85	A本と同一亭主の別会カ	A本と同じ	北河原助五郎	A本と同じ
86	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
87	A本と同じ	A本と同じ	A本88	A本と同じ
88	A本と同じ	A本と同じ	A本87	A本と同じ
89	A本93 上嶋勝右衛門→上嶋新右衛門 鹿嶋太良右衛門→鹿嶋吉郎右衛門	A本と同じ	池田、枕瀬	A本と同じ
90	A本91と同一亭主の別会	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
91	A本90	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
92	A本72と同一亭主の別会	近藤元意→進藤元意 近藤宗故→進藤宗故	A本と同じ	近藤元意→進藤元意
93	A本89と同一亭主の別会	3・19→3・9	A本と同じ	A本と同じ
94	A本と同一亭主の別会	A本と同じ	12・14→12・24	A本と同じ
95	A本と同一亭主別会(板上了意)	A本と同じ	A本64	A本と同じ
96	岩田久五郎→かもや久五郎 鎌田新助と木村七良兵衛なし	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
97	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
98	坂上皆右衛門→坂上宗祐	A本と同じ	坂上皆右衛門→坂上賢右衛門	A本と同じ
99	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ
100	十一屋長右衛門→進藤長右衛門	A本と同じ	A本と同じ	A本と同じ

(表4) 財団法人柿衛文庫所蔵『中古茶事雜集全』(B本)中、A本非重複茶会亭主一覧

会数	亭主名	場所	月	日	有岡道瑞以外の招客名
☆9	枡屋彦三郎	伊丹	10	25	岩田猪之助、北河原助三郎、蓮肉庵(蓮角庵)、
☆21	北河原与次兵衛	伊丹	11	11	池田宗憲、木村玄伯、佐々木玄智、
☆○23	岡田又太郎	伊丹	12	11	森本宗信、鹿嶋宗因、
☆○25	岡田藤次郎	伊丹	12	11	上嶋勘四郎、森本七郎右衛門、
☆○27	坂上與藏	山本	1	16	浮嶋清右衛門、森平六、
☆○28	山中來助	鴻池	2	6	石丸見寿、岩田猪兵衛、
☆33	葛野仁兵衛	?	11	29	山本秀海(蓮角庵)、
37	山本了瑞	山本	12	5	田村保幹、
○38	佛日別傳和尚	伊丹	4	27	多田院別當、中坊、
40	大廣白蓮和尚	伊丹	12	4	坂上尉右衛門、蓮肉庵(蓮角庵)、
☆○43	戒曉	伊丹	12	21	蓮角庵、
☆44	一文字屋助五郎	伊丹	11	16	鴻池新右衛門、加藤五郎左衛門、山本秀海(蓮角庵)、
☆45	鴻池新右衛門	鴻池	11	19	北河原助五郎、上嶋安九郎、
☆47	清和院	京都	5	8	進藤元意、高井十右衛門、
○48	笹屋与兵衛	京都	5	9	(客人記載無し)
○51	下大坊了瑞	有馬	9	23	善福和尚、
☆○52	長泰院	京都	12	4	野村新三、大村彦四郎、野村平三、
☆○55	十一屋長右衛門	京都	4	4	池田浄意、近藤喜右衛門、
☆○56	坂上梅甫	山本	12	24	望海和尚、戒曉、秀海(蓮角庵)、
☆57	北河原助三郎	伊丹	1	22	山村彦兵衛、森本十右衛門、
☆○60	月真院	京都	5	12	田村源右衛門、
☆○61	松屋三郎兵衛	京都	5	18	久田宗也、十一屋長右衛門、
62	白木屋彦太郎	京都	5	18	川口平三郎、川口平兵衛、了岳、
○63	油屋安右衛門	伊丹	5	15	白木屋、鹿嶋太郎右衛門、上嶋常音、
○64	順蔵主	京都	10	17	望海和尚、蓮肉庵(蓮角庵)、
65	鏡屋良意	伊丹	10	13	望海、蓮肉(蓮角庵)、
☆66	坂上市三	摂北	10	22	蓮肉(蓮角庵)、
☆69	西郡八左衛門	?	12	2	三木権大夫、十一屋長右衛門、
☆70	岩田五兵衛	加茂	12	10	坂上左兵衛、大場立元、
○71	坂上松右衛門	山本	12	17	望海、戒曉、蓮肉(蓮角庵)、
☆72	原東鍋七	?	2	6	鹿嶋宗幽、小西与一郎、廣嶋善臺、
☆○73	鴻池宗牧	大坂	2	6	北河浄貞、上嶋勘四郎、森本八郎右衛門、
○75	進藤元意	京都	11	29	杉村三郎右衛門、津留源右衛門、久田宗也、源江屋仁兵衛、
☆76	油屋五郎四郎	伊丹	1	3	上嶋常音、森本宗雪、
○78	池田浄意	京都	12	9	久田宗也、熊田市右衛門、
☆○80	角坊ノ兄隨風軒了夢	有馬	9	6	上嶋安九郎、鴻池新右衛門、
☆○85	角坊伊右衛門	有馬	9	27	藤野紫竹、中村瑞卜、田崎重郎右衛門、
☆○90	梅垣道宣	伊丹	10	19	坂上宗祐、
☆○92	坂上彦太郎	伊丹	12	9	藤本宗円、
☆○93	田村兼和	山本	1	11	佐尾、
☆○94	坂上松太郎	伊丹	12	11	蓮肉庵(蓮角庵)、
○95	坂上了意	摂北	1	14	田村保幹、山中新右衛門、

註) 会数横の☆及び「場所」の項は、(表2)のA本と同様の形で記述をしている。又、○の付しである会は、A本と同一亭主の別会である。

(表5) 財団法人柿衛文庫所蔵『有岡道瑞百亭百会記』(D本)中、A本非重複茶会亭主一覧

会数	亭主名	場所	月	日	有岡道瑞以外の招客名
☆○37	薩摩屋素白	京都	11	11	(有岡道瑞のみ)
42	北河原助三郎	伊丹	閏1	18	関長兵衛、青木忠右衛門、太田繁右衛門、
45	小野清和院	京都	5	8	進藤玄意、池田淨意、高井十右衛門、
46	進藤一葉	京都	3	10	上嶋常有、林西刻、
☆48	鹿嶋九郎右衛門	伊丹	10	25	蓮角庵、岩田猪兵衛、北河原助三郎、
☆60	山川素白	池田	6	9	岩田理兵衛、清水七左衛門、
63	鏡屋良道	伊丹	10	15	望海和尚、蓮肉庵(蓮角庵)、
64	荒木平康	池田	11	17	鹿嶋宗黒、
70	中村平兵衛	池田	4	11	鹿嶋宗黒、上嶋常音、山本秀海(蓮角庵)、鏡屋平兵衛、
☆71	北河原彦四郎	伊丹	2	9	北河原助三郎、瀬堀八郎五、
☆74	岩田理兵衛	池田	12	5	蓮肉庵(蓮角庵)、上嶋勘四郎、荒木五兵衛、岩田五郎左衛門、
☆85	北河原助五郎	伊丹	閏1	29	上嶋常音、蓮肉庵(蓮角庵)、上嶋勝右衛門、加賀屋半兵衛、
89	枕瀬	池田	11	27	左平次、古松宗黒、

註) 会数横の☆及び「場所」の項は、(表2)のA本と同様の形で記述をしている。又、○の付し
てある会は、A本と同一亭主の別会である。

伊丹郷町の酒造家とその一族…北河原助三郎、鹿嶋九郎右衛門、

北河原彦四郎、北河原助五郎、

伊丹郷町近郊の酒造家とその一族…〔池田〕荒木平康、〔池田〕

中村平兵衛、〔池田〕岩田理兵衛、〔池田〕山川素白、

伊丹郷町の人物…鏡屋良道、

池田郷町の人物…枕瀬、

茶湯宗匠及び茶道具の職人…薩摩屋素白、

伊丹郷町以外の寺院…〔京都〕小野清和院、

近衛家熙の側近…進藤一葉(進藤刑部大輔長之)、

となる。近衛家熙の側近進藤刑部大輔長之の名前があり、A本で見
た分類と重ね合わせて考えると、近衛家の側近及び近衛家と交流の
ある町人や僧侶の名前が少なからず存在していることが浮かび上が
ってきた。客人についてはB本同様、A本と合致する茶会であつて
も記載の相違が少なからず見受けられる。しかし、個々の人物の分
類についてはここまでと同じ傾向であると思われる。A本と異なる
十三会から同様に複数会参加している人物を見ると(表3・5)、
二会…北河原助三郎(四八・七一)、鹿嶋宗黒(宗幽カ)(六四・
七〇)、上嶋常音(七〇・八五)

五会…蓮角庵(蓮肉庵・山本秀海)(四八・六三・七〇・七四・

となる。大きな相違はなく、酒造家を中心に摂北地域の人物、中でも近衛家熙との茶湯での交流関係が指摘できる町人の会に多数名を連ねた人物がやはり多く指摘できる。

また、客組みについて簡単に述べると、京都の人物が亭主の茶会は、京都の人物が摂北地域の酒造家や僧侶達と同席する客組が比較的多くある。そして、大坂の人物の場合は、同様にそういった人物が同席していても、同業者であることや摂北地域に由縁のある人物同士の繋がりという色彩が濃いと思われる。また、伊丹郷町や池田郷町等の人物が茶会を催した場合、摂北地域の人物同士の交流という面の強い客組みになっている。本稿では個々の人物をより明確にするために区分を細かく設けたが、伊丹郷町・池田郷町とその周辺というよりは、摂北地域という大きい括りで交流範囲を捉えた方が適切であると思われる。

最後に京都の町人、家原自仙・自元親子についての記述を示しておく。これは三井高房の『町人考見録』「家原自元」の項に記されているものである。²⁶

一親は自仙といふ。所は西洞院竹屋町上ル丁に住す。自仙代より細川どのへ大分取替相滞候へども、いまだ相続いたし、なを彼御屋敷勤候所、四つ宝新銀立替の節、又式三百貫目ほど相滞、其上金借り旁故、借しかたへは年賦に断を申。扱自元は肥後へ下り、段々御すくいを願候所、大守は元来茶を御好み被成、一入自元へは御目かけられ候故、先は願の通相調、古借の内へ新銀七十五貫目宛、五年の内相渡り申積りにて、一兩年も右のごとく相渡り来り候所、自元も相果、其前年の暮よりはや、約束の通りには相渡り不申、殊に立花飛驒守殿へ前々取替滞居申候を、自元起し出し、大坂町人共と相仕に成、此仕送りを致し候所、初年は究のごとく少々、春は屋敷より請込に相見へ候へども、其次の年より段々江戸不時の御物入ども打続、引に不引、五年の内には是も四五百貫目滞、身上さしつかへ申候。それ故居宅も明、ひつそく致し、なを又今の次兵衛肥

後へ下り願ひ候へども、御国も凶年故、はかばか敷渡る事も無之、少々宛すくい銀の内渡りを受取居申候。大かた大名がしの筋は同じ事とは云ながら、其内わけて細川家は、前々より不埒成御家柄にて、度々町人の借銀断在之、此節辻・玉屋・家原、皆々此御屋敷へ大分の滞故、つぶれ申候。いづれも件の内済の積りにて、年々相渡り申やくそくには候へども、みなみな跡は又々不埒に成事、あながち細川家には限り不申、大名がた年賦断の通例と存べく候。

刀目利であつた家原自元は茶湯に長じており、親自仙の代から家業の傍ら行なつていた肥後細川家への大名貸しも茶湯で懇意になつたのが長じて順調に進んでいた。しかし、家原家は大名貸しによつて逼塞している。まだこの頃には行なつていなかったものの、後に伊丹郷町の人物が大名貸しを行なう肥後細川家と関わりのある人物の名が見え、更に先にも触れたように、細川家京都留守居役牧市左衛門が亭主の会に伊丹郷町の人物が招かれている点も特徴の一つとして指摘してみてもよからう。⁽²⁷⁾

五 近衛家と伊丹郷町

前節の茶会記分析によつて、彼等摂北地域の人物が当該地域内同士の交流として茶湯を嗜んでいただけでなく、多様な階層・地域の人物と交流を重ねており、そこには近衛家と茶湯での関わりのある人物が少なからず含まれていることが浮かび上がつて来た。そこで、本節では近衛家と摂北地域の関わりについてもう少し掘り下げて述べることにする。

寛文元（一六六一）年から伊丹郷町及びその周辺村は近衛家領となつていた。近衛家はその後、正徳元（一七一）年に伊丹郷町周辺十一カ村を、正徳三（一七一三）年には池田郷町株三百株を、と摂北地域の家領を拡大して

いる。⁽²⁸⁾伊丹郷町で見ると、寛文元年に近衛家領となつて以降、摂北地域の持つ経済力が近衛家の台所を多いに助け、近衛家側も米の不作時には年貢米や冥加銀を「年貢酒」で納入する形に切り換える等の酒造家の保護を図つた。そして、伊丹郷町の町政機構を司る惣宿老職を勤める家々を中心に、伊丹郷町の酒造家が定期的に近衛家と交渉を持つたことは『伊丹市史』第二巻の記述からうかがえる。そういった行政的・経済的な側面の強い交渉以外に、伊丹郷町と近衛家に関する交渉は、古野将盈編の『有岡庄年代秘記』から以下に示すものが見出せる。⁽²⁹⁾

○貞享三（一六八六）年六月

三 六月近衛内大臣家熙公野宮御額 御染筆

○元禄十二（一六九九）年二月

十二 二月上嶋与惣兵衛誹名鬼貫御殿御家来分二被成候旨御触

○宝永三（一七〇六）年十月六日

三 十月六日御殿御部屋様有馬入湯、御家老・御代官下向上下御泊

○正徳元（一七一）年十二月

正徳元十二月十六日旧・増一円御家領二相成候二付、惣役中・酒家中大参会

○享保十八（一七三三）年

十八 今年坂上宗清百歳参殿被 仰付、

この史料は、伊丹郷町内での主要な出来事のみが記述対象であるので、細部まではうかがえない。しかし、ここまでの茶会記の分析から、摂北地域の人物と近衛家と交流関係があったと考えられる人物との茶湯での交流は明らかである。よって、経済的・行政的な面だけでなく、茶湯を含めた遊芸の面での交流も、伊丹郷町や池田郷町を含む摂北地域の人物と近衛家の間に存在したと考えることができるのではないだろうか。また、『中古茶事雑集』（B

本）には近衛家の口切茶事が記されている。そこには摂北地域の人物の参会はうかがうことはできないものの、近衛家の茶事の記録が伊丹郷町の人物に伝わったこと自体、その交流の存在を半ば指し示していると思われる。そして、そういった交流が存在したならば、『茶湯百亭百会之記』（A本）をはじめ各茶会記に漏れなく記されている有隣軒（鷹司輔信）が亭主を勤めた会のように、道具の下賜が何度か存在した可能性が考えられる。³⁰

六 おわりに

本稿では、地域における茶湯の展開の研究が不十分であるという問題点の下、元禄期頃までに大坂近郊の在郷町として発展した摂津国伊丹郷町を中心に摂北地域の茶湯について検討を行なった。従来、俳諧と併せて盛んだった諸芸の一つとしてのみ位置付けられていた伊丹郷町の茶湯であるが、有岡道瑞の茶会記を検討することによって特徴的とも言える面が浮かび上がってきた。伊丹郷町の茶湯は、酒造家を中心に医師や僧侶も含めた摂北地域の人物、京都・大坂の町人、茶湯宗匠等の交流関係の下に存在し、そこには近衛家との茶湯での交流が指摘できる町人や近衛家の側近の参会が見受けられる。また、伊丹郷町とその周辺というよりは、摂北地域というより大きな括りで捉えた方が良いだけの広がりを見せていた。そして、経済的・行政的な面だけでなく、茶湯を含めた遊芸の面での交流も、摂北地域の人物と、寛文元（一六六一）年から同地域を所領とした近衛家の間に存在したと考えられる。他に、後の時期に伊丹郷町の人物が大名貸しを行なう肥後細川家と関わりのある町人や細川家京都留守居役、摂津国麻田藩藩主青木家との間にも茶湯での交流が存在していた点も挙げられる。以上、若干の指摘もできたが、考察不足な点も多く残されている。享保五年から享保十二年までについては、拠って立つ史料が『有岡道瑞百亭百会記』（D本）だけであり、享保五年までに比べて信憑性と言う点では疑問が残る。この点は、本稿で取り上げることが

できなかった有岡道瑞の他の写本類との競合により問題を解決して行きたい。また、撰北地域の茶人の茶会では、本稿では指摘できなかったものの、道具の貸し借りが少なからず存在していたようである。この点については道具立てから見る茶湯の特徴と共に今後検討を要する課題である。

註

- (1) 谷端昭夫『近世茶道史』、「序章近世茶道研究史」(一九八八年、淡交社)
同「地域茶道の研究」(千宗室監修・谷端昭夫編『茶道学大系』第二巻茶道の歴史所収、一九九九年、淡交社)
同「近年の茶の湯研究から」(『藝能史研究』一五〇号所収、二〇〇〇年、藝能史研究会)
- (2) 前掲谷端昭夫『近世茶道史』、「序章近世茶道研究史」
- (3) 『全集茶道』巻の十一「茶人篇」(三)・巻の十三「特殊研究篇」(一九三七年、創元社)
「茶道郷土史」は、一九五九年から連載され、ほぼ各県を網羅。
- (4) 『茶道聚錦』全十二巻(小学館、一九八三年)
前掲『茶道学大系』第二巻茶道の歴史
『茶の湯文化学』は一九九三年に発足した茶の湯文化学会の会誌である。同会はまだ、学術大会や各地域での例会など多くの発表の場も提供している。
- (5) 本稿で検討する五つの茶会記は、全て財団法人柿衛文庫所蔵のものである。その内『茶湯百亭百会之記』は、岡田利兵衛氏が『伊丹資料叢書』1伊丹文芸資料(一九七五年、伊丹市役所)で翻刻紹介しており、その際、A本と翻刻を行なった『茶湯百亭百会之記』を解説中で位置付け、残り四種類の内、『茶湯会席』を除く三種類をB本・『中古茶事雑集』、C本・『有岡道瑞茗談集』、D本・『有岡道瑞百亭百会記』として説明している。本稿もその位置付けに従う形で『茶湯百亭百会之記』と異本類にA本からD本と各史料名の後に付記を加え、説明の成されていない『茶湯会席』は、E本と改めて位置付けをし、同様に付記を加えることとする。
- (6) 『伊丹市史』第六巻第一章「第二節近世中期の文学」(一九七〇年、伊丹市)
『新・伊丹史話』第三章「第四節伊丹の町の文芸活動」(一九九四年、伊丹市立博物館)
『茶湯百亭百会之記』(A本)の翻刻紹介は、(註5)の中に記した通りである。また、岡田氏の一連の著述は、著作集として後にまとめられている。
- (7) 『茶道郷土史第3回 茶道史の新天地―近畿北部篇―』(『淡交』第十三巻第九号所収、一九五九年、淡交社)
吉村厚子「伊丹と俳諧」(『淡交』第四十八巻第四号所

収、一九九四年、淡交社)

今井美紀「伊丹という地」(前掲『淡交』第四十八巻第四号所収)

筒井紘一「伊丹の茶の湯」(前掲『淡交』第四十八巻第四号所収)

瀬川照子「伊丹の文芸―伊丹風俳諧と鬼貫」(『茶道雑誌』第六十五巻第五号所収、二〇〇一年、河原書店)

岡田麗「伊丹の茶の湯と柿衛文庫」(前掲『茶道雑誌』第六十五巻第五号所収)

広瀬千紗子「茶の湯と江戸文学」(千宗室監修・戸田勝久編『茶道学大系』第九巻茶と文芸所収、二〇〇一年、淡交社)

石塚修「西鶴文芸への茶の湯の影響」(前掲『茶道学大系』第九巻茶と文芸所収)

(9) 『伊丹市史』第四巻(一九七三年、伊丹市)六四一頁より六七〇頁。岡田氏が師匠筋の人名を抽出した図表は、前掲『伊丹市史』第六巻七七頁参照。

(10) 北河原猫信は『有岡逸士伝』上巻に、

猫信者北川原氏永順之子、天資豁達ニシ而、情ヲ放ニス、已ニ自ラ多病ト称シテ門ヲ杜ルコト、動スレハ一紀隠ニ似而隠ニ非ス、其ノ言語進退皆俳諧ニシ而、未ダ其ノ俳句ヲ聞カズ、性酒ヲ嗜ミ、毎ニ親戚ヲ集メ而夜ヲ以テ昼ト為ス、若シ睡眠ニ着ク時ハ、則罰ハ金谷之例ニ依ル、酩酊知所無シト雖ドモ、一日モ未ダ其ノ産業ヲ忘レス、常ニ弁天ヲ信ジ、箕面山頭ノ瀑水ヲ汲テ酒ニ醸シ、銘シテ滝水ト謂フ、籬

辺ニ菊数叢ヲ植テ、以テ清賞ニ供ス、世之菊ヲ愛スル者ノ猫信ヲ知ラズト云コト莫シ、且ツ其レ菊ハ愈疾延年之徳有ルト雖ドモ、信也僅ニ二百ヲ以テ死ス、嗚呼悲哉、今五十年ノ寿ヲ以百年ノ楽ヲ為ス者ハ其レ唯リ信乎、

と、菊の栽培で著名な人物と記され、松本市左も『有岡逸士伝』上巻に

在岡ノ郷ニ風流ノ士有リ、姓ハ松本、名ハ市左、常ニ自ラ南草ヲ製スルコトヲ業ト為ス、其ノ細金糸ノ如ク、其ノ薫芝蘭ニ似タリ、偶客有リ、嘆シメ而曰ク、曾テ松本之製ヲ以テ贈リモノト為ルニ、貴介公子之前ニ於テ恥ジズ、之ニ因リテ其ノ名遠近ニ鳴ル、性亦タ隠逸ニシ而、好ミテ書ヲ読ミ、風雅ヲ嗜ム、法橋維舟翁之徒也、翁撰集ノ時曰ク、汝直ニ字ヲ以テ排号ト為ヨト、因リテ以テ称セ見ラル、秀逸ノ吟多ク編輯之中ニ見タリ、少壮ニシ而病患テ死ス、と、南草栽培で著名な人物と述べられている(前掲『伊丹市史』第四巻六四七頁、六四八頁。なお、引用に際し読み下しに改め、句点を追加した)。

(11) 『有岡逸士伝』上巻「信房」(前掲『伊丹市史』第四巻六四三頁)

(12) 『京都の歴史』6 伝統の定着第二章「第一節 伝統文化の組成」(一九七三年、京都市、學藝書林)

守屋毅氏が『藝能史研究』六十三号(一九七八年、藝能史研究會)と『同』六十四号(一九七九年、同研究會)に翻刻紹介を行なった「池坊永代門弟帳」によると、元

禄期から享保期頃までに撰北地域では、有馬郡を中心に門弟の名が見え、何れも伊丹屋喜兵衛や北畠一之等誰かが入門に際して同道か取次ぎを行なっている。伊丹地域では享保末年までに次の二人の入門があった（同門弟帳—その二）。

同年（享保六年）辛丑四月廿九日

撰州伊丹村

松屋与兵衛

大坂北畠一之取次

同年（享保七年）壬寅五月十九日

撰州伊丹村

北河原彦四郎

花屋利兵衛取次

(13) 前掲『伊丹市史』第六卷第一章「第二節近世中期の文学」

『茶湯百亭百会之記』（A本）「解説」（前掲『伊丹資料叢書』1伊丹文芸資料四〇九頁）

(14) 『有岡逸士伝』上巻「人角」（前掲『伊丹市史』第四巻六四七頁）

(15) 『八尾八左衛門日記』の同日の条には

（略）有岡道瑞老死去、本氏山田、其後、佐尾柳と被改候、七十三才之由、

と記されている。『八尾八左衛門日記』は小林茂氏の校注で『日本都市生活史料集成』十在郷町編（一九七六年、学習研究社）に翻刻されており、本稿の引用は同本二九〇頁から行なった。

(16) 例えば、文政九（一八二六）年に伊勢茂美題、阿波国

棲霞亭編で版行された『茶人大系譜』では久田宗也（不及斎）の門弟として「京師ノ人、元禄年間ノ人也」と記されており、天保八（一八三七）年尾張藩南阪富永輪編の『茶人大系図』も久田宗也の門弟として「京師人、元禄中ノ人」と挙げている。

(17) 佛日寺別傳和尚による元禄十二（一六九九）年五月の序文は

茶湯百亭百会序

有岡氏道瑞哲士從妙年雅好茶爐之風騷、凡構亭、設齋松窓・竹扉・砌石・植樹、莫不具備茶爐風標、纔垂湘簾啓紙窓、尽酌茶爐之古焉、嗚呼至哉、妙矣歲時或策杖、於平城幽尋豪貴富客、數応茶爐之雅会、克詳察其体態文物記之、胸臆而不遺矣、若夫床上取揭之軸、某試焙、某和歌漢篇、某茶器、茶杓、茶碗、某花、某瓶、某鐘、某所饗飲食、某文房四宝、某至其砌石・窓門・種樹石碑靡不成、是詳紀之焉、時人嘉其雅標、所以多遊豪貴之門亦美多矣、道瑞主翁意欲貽厥風彩於後代児孫而、復克繼其風操名集云老談、己卯之夏予偶相訪、評予紀數言而冠其首書末由辟之粗紀、其一二云爾、

元禄十二歲旅己卯五月穀旦

仏日別傳誌

と記されている（前掲『伊丹資料叢書』1伊丹文芸資料六七頁。なお、句点を引用に際して補った。）

(18) 『八尾八左衛門日記』享保十九年十月十四日条に（前略）道瑞老葬礼、法専寺より黒墓へ行候、遺言

二付、門弟中淺黄上下西宮在辺よりも見へ、此方より八左衛門喪服ニ而遣候、賑葬礼ニ候、

とあり、西宮にも門人を持つていたことがわかる（前掲『日本都市生活史料集成』十在郷町編二九二頁）。岡田鴨峰については、『有岡逸士伝』下巻に

鴨峰者岡田氏夏竹之子也、身常二塵ニ処シ而塵ニ染マラズ、夙ニ風雅之志有リト雖ドモ、未ダ師ニ從而学バズ、偶々隠竹齋ニ謁シ而茶事ヲ習、時々夜霜軒ニ会シ而マヽ俊逸之句有リ、從來蚰久・蜂房与莫逆之交リ也、或時二士ノ曰ク、公甚ダ誹諧ヲ嗜ムト雖ドモ、未ダ誹名ヲ聞カズ、何ゾ師ヲ求メザル、亦タ何ゾ誹名ヲ称セザルヤ、公默然タリ、傍ニ一老人有、謂テ曰ク、蓋シ二士ノ号為ル虫ト魚与ヲ以ス、今公モ亦鳥ヲ以テ号為ヨト、因リテ自ラ鴨峰ト称ス、と記されている（前掲『伊丹市史』第四卷六六三頁・六六四頁）。

(19) 『茶湯百亭百会之記』（A本）（前掲『伊丹資料叢書』

1伊丹文芸資料一〇五頁）

『中古茶事雜集』（B本）は、

右依門弟中所望写之、

享保五子年三月如意珠日

隠竹齋道瑞（印）

（判）

と記されている。他に道瑞が弟子を持つていた可能性を示すものには、『茶湯百亭百会之記』（A本）の九十三・上嶋常音が亭主の会と四十七・坂上善五郎が亭主の会で隠竹齋（道瑞）作の茶杓が見えること等が指摘できる。

(20) 筒井紘一『茶書の研究 数寄風流の成立と展開』（二〇〇三年、淡交社）

『旁求茶会記』は、『的伝茶会記』を編んだ人物が八巻に『松屋会記』や『宗湛日記』等各種の茶会記から各亭主毎に茶会を集成したものであり、筒井氏は稻垣休叟（延享元年〔文政二年〕を編者とされている。その巻六に「北脇一元」一会、「坂本周齋」一会、「山中（鴻池）道憶」二会、「福島屋了意」二会、「土岐二三」一会、「久田宗也」二会が収められているが、「山中道憶」と「久田宗也」の二会の中の各々一会を除いては、有岡道瑞の参会している茶会であり、記載の内容などから判断して、道瑞の他会記を典拠としたことはほぼ間違いないと思われる。

(21) 別傳和尚の序文は、次のように記されている。

後代児孫而、復克繼其風標名集云茗談、己卯之夏予偶相訪評、予紀數言而、冠其卷首、書末由解之粗紀

一二云爾、

元禄十二年歲旅己卯五月穀旦

佛日別傳誌

奥書は（註19）に記した通りである。

(22) 前掲『日本都市生活史料集成』十在郷町編二二五頁。

(23) 前掲筒井紘一「伊丹の茶の湯」（『淡交』第四十八巻第四号所収）

(24) 前掲『茶湯百亭百会之記』（A本）「解説」

「摂北地域の酒造家」とした人物は、具体的に地所が特定できなかったものの、摂北地域の酒造家である可能性が極めて高い人物についてここに含めた。なお、茶会に

参加した各人物の分類にあたっては、以下の文献を主に参考にした。

『有岡逸士伝』(前掲『伊丹市史』第四卷所収)

伊丹市立博物館編『伊丹資料叢書』8 伊丹酒造家史料上

・下(一九九二年)

『新修池田市史』第二卷近世編(一九九九年、池田市)

『京羽二重』貞享二年版・宝永二年版(『新修京都叢書』第二卷所収、一九六九年 臨川書店)

『京羽二重織留』・『京羽二重織留大全』(前掲『新修京都叢書』第二卷所収)

『元禄覚書』(『新撰京都叢書』第一卷所収、一九八五年、臨川書店)

『京都御役所向大概覚書』上・下(一九七三年、清文堂出版)

宮本又次編著『大阪の研究』第五卷(一九七〇年、清文堂出版)

『町人考見録』(『日本思想大系』59 近世町人思想所収、一九七五年、岩波書店)

竹下喜久男・井出努『摂北岩田家のあゆみ』(一九九九年、岩田土地株式会社)

(25) 進藤刑部大輔長之の他会記参会記録『他所之茶事道具献立之留』は、木下龍也氏が『茶湯―研究と資料』の十一号から十三号において翻刻紹介をしている。

(26) 『町人考見録』中巻『家原自元』(前掲『日本思想大系』59 近世町人思想、二二二頁から二二三頁)

(27) 細川家と同様、後に大名貸しを行なう大名家と交流の

あった事例としては、他に摂津国麻田藩青木家がある。そして、こういった交流が一度限りでなかったことは、文政二(一八一九)年頃成立の古野将盈編『有岡庄年代秘記』の

○享保十二(一七二七)年十一月

十二 十一月青木甲州御父子上島宅御茶御入席

○享保十四(一七二九)年二月

十四 二月青木甲州公北川原氏御茶御来入

といった記述等からも言えよう(前掲『伊丹市史』第四卷六七八頁)。

(28) 『伊丹市史』第二卷(一九六九年、伊丹市)

前掲『新修池田市史』第二卷近世編

(29) 前掲『伊丹市史』第四卷六七三頁から六七八頁より抜粋引用。なお、貞享三年の出来事に關しては、『有岡逸

士伝』上巻「長賢」の項に

有応山金剛院前住長賢法印者、撰之在岡郷野宮牛頭

天王之別当ニシ而、本ト高野山西禪院之子院也、野

宮、復タハ豊桜崎宮ト曰、嘗テ長賢法印弘ク法ヲ野

宮ニ開ク、守神之郷子ヲ懇念スルコト尤モ渾、郷人

貴ト無ク、賤ト無ク、競轡マリテ、皆其ノ恵ニ懷カ

ザルト云コト無シ、前ノ近衛殿太閤基照君深ク長賢

師之修法ヲ信ジテ、即チ御室御所院ニ転達ス、因リ

テ院家安養院ヲ兼帯セシム、是ヲ以テ直ニ仁和教寺

ノ末葉ト為ル、嗚呼其ノ功焉ヨリ大ナルハ莫シ、シ

カノミナラス貞享三年丙寅夏六月近衛内大臣家照君

額ヲ野宮ニ賜、且ツ牛頭天王之縁記者、平松中納言

時量卿之作也、持明院宰相基時卿之カ繕書ヲ為ス、其ノ題名ハ前近衛殿関白基熙君ノ書シ玉フ所也、蓋シ是レ有岡之栄光也、賢師修法之暇、屢々和歌之道ヲ探ル、兼テ俳諧之趣ヲ嗜ム、花宸月夕、其ノ情ヲ移サズト云コト無也、秀逸之句多ク人口ニ在リ、と記されている（前掲『伊丹市史』第四卷六四二頁）。鷹司輔信から「摺墨」という銘の花生が有岡道瑞に、「ひちかき」という銘の茶杓が蓮角庵に、「碇」という銘の竹輪が岩田五良左衛門に下賜されている。

〔付記〕本稿は、藝能史研究会平成十二年二月例会で報告を行なった内容の一部を基に、佛敎大学鷹陵史学会第九回年次研究会大会にて報告したものに加筆修正を加えたものである。また、関連報告を大阪歴史学会近世史部会、平成十六年度茶の湯文化学会創立十周年記念大会でも行なった。当日貴重な御意見を賜った方々に厚く謝意を申し述べる次第である。とりわけ、竹下喜久男先生、谷端昭夫先生には様々な助言を賜った。記して謝意を申し述べる次第である。

また、財団法人柿衛文庫の皆様には史料閲覧で大変御世話になった。末筆ながら厚く謝意を申し述べる次第である。

本当に有難うございました。